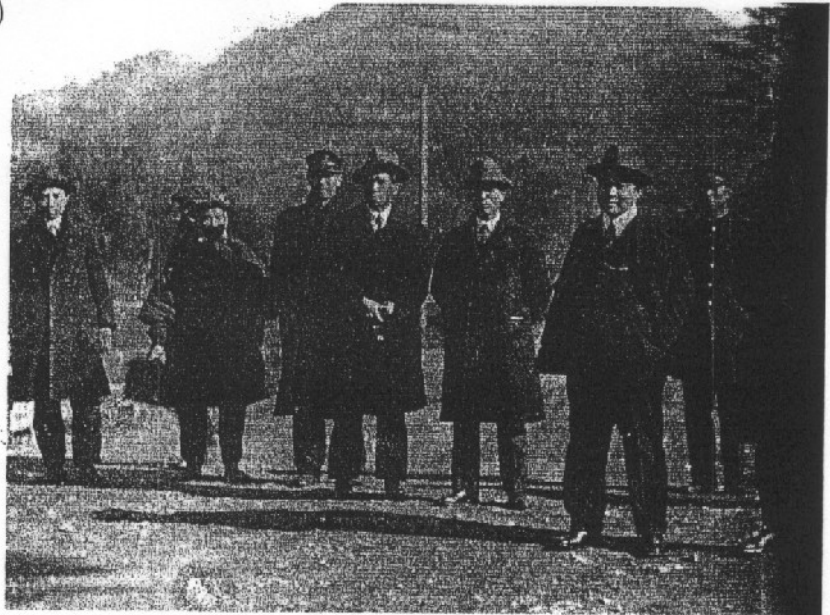


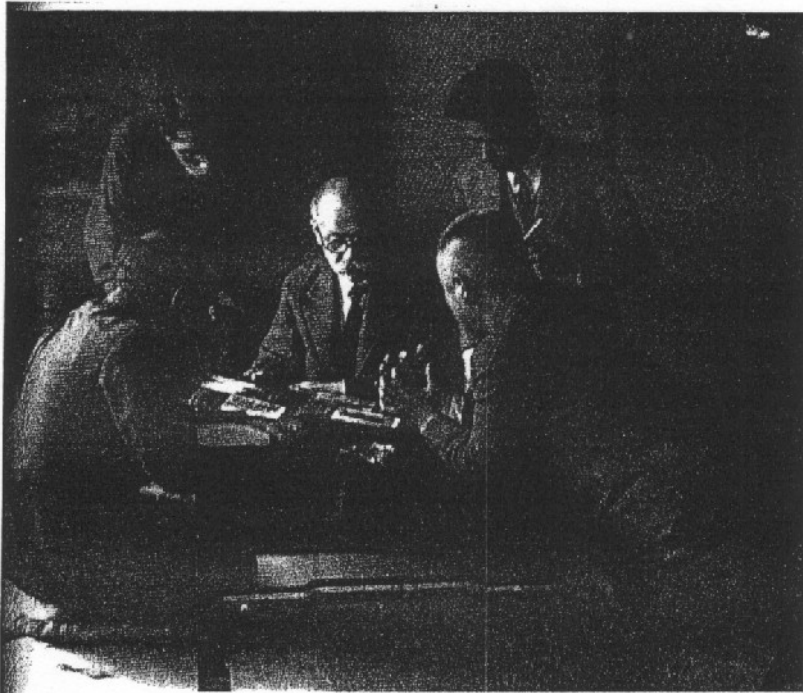
昭和10年 (46歳)



園村(現愛知県東栄町) 御園の花祭を見終えた渡澤らの一行。人影の長さから推して朝だろ  
う。右から宇野圓空、一人おいて渡澤敬三、また一人おいて早川孝太郎、小川徹、左端が写  
真提供者の市川信次。昭和10年(1935)1月。

(全集 12 手塚社)

昭和14年 (50歳)



大島農場(福島県郡山市)で写真アルバムを見る石黒忠篤。豪快な鼻髭が初対面の人の印  
象となった。石黒の左肩越しにのぞくのが早川。昭和14年(1939)6月。

(全集 12 手塚社)

昭和十一年(一九三六)五月、九州帝  
國大學から東京にもどった早川は、石黒  
忠篤が会長の農村更生協会に囑託として  
はいり、二年後に主事となる。  
農村更生協会は疲弊した農村の更生を  
目的としたが、そのために推進したのが  
満洲移民であり、満蒙開拓青少年義勇軍  
だった。早川はその手助けをしながら、  
「簿記記帳」の啓発と農村の実情調査を  
併せて全国各地の農村を訪ね、また戦時  
体制化でやがて逼迫するであろう食料確  
保のために、朝鮮、中国に出かけて農産  
物の調査なども行なっている。  
早川には多忙を極めた昭和一〇年代だ  
ったが、協会の主事という肩書き故に見  
える、農村・農民を通しての民俗を手帳  
に書き留めることも忘れなかった。  
早川は敗戦とともに協会を退くが、石  
黒忠篤との公私にわたるつながりは、以  
後も早川が世を去るまでつづいた。

「石黒農政」の名参謀

(日本民俗文化大系) 早川孝太郎

三 福治雄

孝太郎の福岡生活は、三年で終わり、昭和十一年に東京へ帰る。  
帰京後職に就いたのは、農村更生協会であった。この協会は、昭和初年の農村不況を背景に、そ  
の克服と更生をはかるために設立された機関で、創立者は日本の農政に大きな功績を残した石黒忠  
篤であった。石黒は、柳田国男の農商務省における後輩であり、洪沢敬三の親戚でもあって、民俗  
学にも理解を示し、また自身は若くして農政学を志し、農村の立て直しを学問的な面から根本的に  
考えていこうという態度を久しくもち続けていたので、九大の小出教授の推挙で孝太郎が入って  
ると大いに重用して、かれを各地農村に派遣して、簿記の指導や農家の経営指導を行なわしめ、ま  
たその間、農業技術や農民生活の実際的な調査研究を自由に行なわしめた。

昭和26年 (62歳)



昭和26年7月28日、長孫城駅の早川先生(右) 丸山 彰氏(左)

この時の写真資料をお借りした。

昭和五五・十二・十三  
偉大なる  
旅人 早川孝太郎先生  
ふるさと学級 丸山 彰

当日駅で出迎えた長孫村長 丸山 彰氏

昭和22年4月長孫中学校 初代  
校長は 浅井重雄氏。長孫村村長は  
丸山 彰氏。学校図書予算50万円。  
早川先生の『花祭』の前編セットを  
豊橋の書店で求める。2,500円だった。  
(24年1月31日)



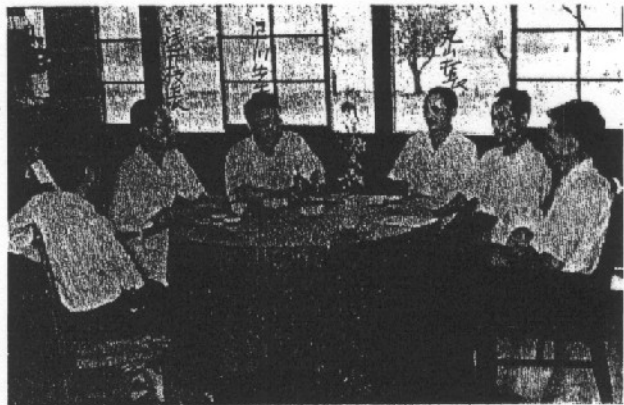
長孫中学校に於ける講演



講演を聞く生徒

講演の内容  
日本には数多くの島が  
ある。今までに二〇〇ぐら  
い調査した。それ以外の  
島には昔の姿が残っている。  
今から九州の南の方の島の  
民俗調査に行く予定だ。

ちよつとやせ型で、実に地味な  
方であり、学者であるが、偉ぶ  
るような風は全く見せない方  
であった。  
宿直室に泊るもらい、一夜  
の語り話をした。(浅井重雄)



歓談 (左より3人目 早川先生)



松林の中の日輪兵舎。滿蒙開拓青少年義勇軍は昭和13年（1938）1月に募集を開始、敗戦の年までに8万6530人の青少年を満洲に送った。（全集12 未來社）

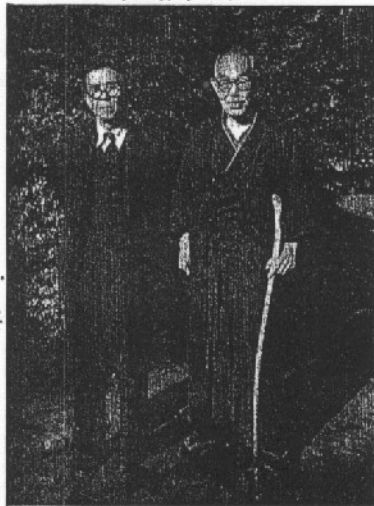
考  
早川孝太郎の残した日本民俗学に関する書籍、論文、調査報告

雑誌等の数

総論	17	合計336
社会組織	29	日本民俗学 文献総目録
通過儀礼	5	
衣食住	12	日本民俗学 編纂
生業	59	
年中行事	40	（弘文堂）
信仰	57	この本より 抜粋
芸能	40	
口承文芸	61	
各県民俗誌	16	

昭和27年（63歳）

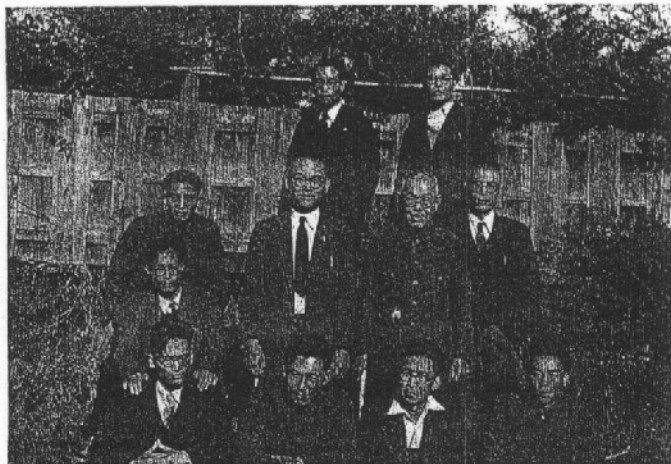
九州帝大農学部でお世話になった  
小出満二<sup>主任</sup>教授に再びお世話にな  
ることになった。



早川（左）と「講習所」所長の小出満二（撮影時は鯉淵学園長）。小出は、早川が九州帝國大學に留学したときの恩師である。昭和127年（1952）。

敗戦の翌年一月、早川は十年近く勤めた農村更生協회를辞し、全国農業会高等農事講習所（以下「講習所」と記す）に講師として行くことにする。「講習所」は、敗戦によって閉鎖された、滿蒙開拓幹部訓練所と滿蒙開拓指導員養成所の教職員の出遇と、在学生の進路を早急に決めなければならぬことから、昭和二〇年（一九四五）一月一日に茨城県鯉淵村（現内原町）の幹部訓練所跡に創設された。「講習所」は昭和二六年（一九五二）に「鯉淵学園」と改称。早川は亡くなるまで同学園の講師を勤めた。

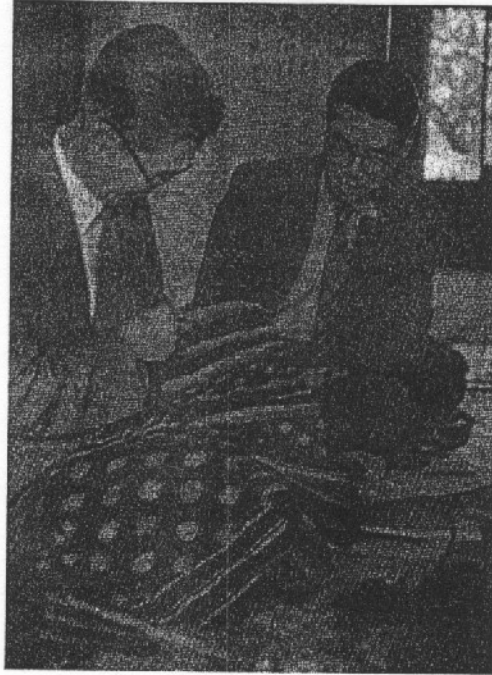
（全集12 未來社）



早川が勤め始めたころの「講習所」教職員。早川は前列右から二人目。そのうしろに小出満二所長。所長の向かって左にいるのは、早川と同じ農村更生協会にいた楠正克。（全集12 未來社）

昭和31年(67歳)

審議委員となり、民俗資料関係の文化財指定や記録作製に尽力した。  
 福岡県古表神社と大分県古要神社の傀儡(カネウチ)と、宮崎県東米良地方の狩猟用具を調査指定の裏付けを行ない、傀儡は昭31年狩猟用具は昭32年に指定された。



本荘市石沢で野鳥を見る。

(全集12 丰楽社)

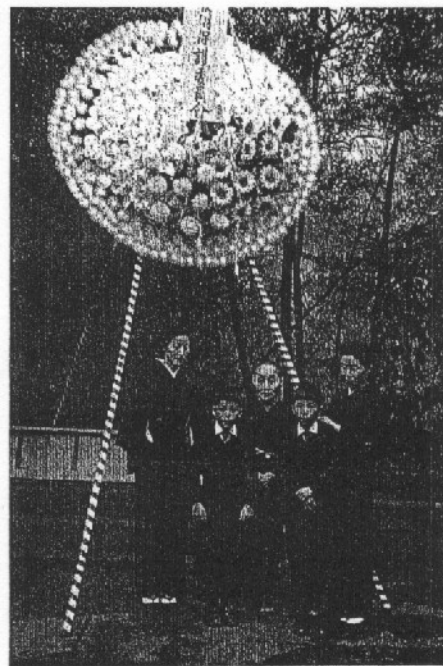
初めに調査したのは本荘市石沢、昭和三二年(一九五六)六月二日のことで、田に行く前に簡単な説明を受けた。  
 早川はこの調査の二カ月後に入院し、年末に不帰の人となるため、文化財保護委員会臨時専門審議委員としては最後の仕事となった。



本荘市石沢で蒸器を手にする早川。

(全集12 丰楽社)

昭和31年12月30日告別式(67歳)

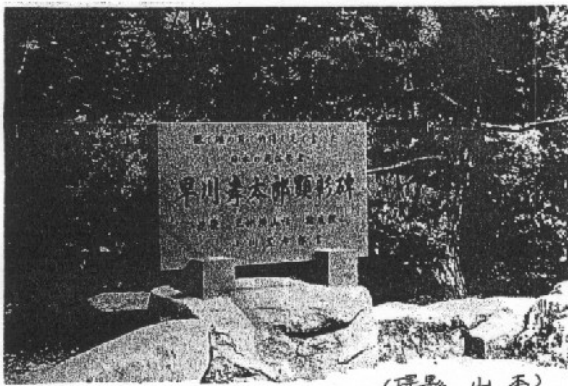


早川さんを平う今日この時、早川さんにゆかりのある全国の山も河も鳥もけものも、みは悲しみの頭をうたはかっていることでありまう。

(由緒不明な代表者 藤井米二氏の長崎の想)

昭和31年(1956)8月12日、肋膜炎と肺結核のため東京・飯田橋の警察病院に入院。同年12月23日午後2時、心筋梗塞を併発して永眠。享年67歳。告別式は12月30日に池袋の禅巖寺で行なわれた。

(全集12 丰楽社)



(撮影 山本)

昭和52年 地元有志で顕彰碑が建てられた。「眼で確め耳で納得し足で誓った日本の民俗学者」と記されている。(新城市長篠匠王寺)